

第3章 新聞分析からみた「共感」がもつ現代的意味に関する一考察

七星 純子

NANAHOSHI Junko

川上 和宏

KAWAKAMI Kazuhiro

1 はじめに⁽¹⁾

昨今、「共感」という言葉は日常的にもよく見かける言葉となっているが、そもそもどのような歴史を持つ言葉なのだろうか。1960年代以降の日本では、まず教育界においてC.ロジャースの影響をうけ、当時の『生徒指導の手引き』にある「共感的理解」という用語とともにその言葉がもたらされた(cf.近藤 1997: 64)。また、看護・介護といった対人支援職においても、支援上重要かつ基礎的な技能だとされている。とりわけ看護学の分野では、研究上の基礎概念としても、教科書等で扱われる実践上の技能としても、重視されている(cf. 福田 2010)。一方、こうした対人職・支援職に限らず、「共感」という言葉は、専門的用語の範疇を超えて、日常用語として頻繁に耳にするようになってきた。この共感という言葉は、哲学や各専門分野においてその概念や定義の蓄積は多くあるが、一般的な用法としての先行研究はほとんどなされていないといえてよい。

そこで、本研究では、「共感」の言葉の歴史や意味の変遷、新聞紙上における言葉の普及と用法の変化に着目し、現代語における「共感」という言葉の意味規定とその動向を整理することを目的としながら、この言葉が広く使われるようになった社会的な背景の考察を試みたい。

2 「共感」という言葉の歴史

ここでは、「共感」という言葉がいつ登場し、どのように定着していった言葉なのかについて見ていくことにする。

2.1 「共感」の一般的な使われ方についての先行研究

「共感」は哲学、心理学、教育学、看護学など幅広い分野で研究されているが「共感」という言葉の一般的な使われ方やその変遷を追ったものは管見した限りは、仲島陽一の『共感の思想史』だけである。

辞書における「共感」について調べた仲島によると、現在の使われ方で辞書に登場したのは、1949年の『言林』で「共感」という単語は戦後に認知され、定着したものである(仲島 2006: 12)と言う。しかし、何を根拠にして、定着・認知されたとしているのか

は、文献上は確認ができなかった。

仲島は、「共感」について次のようにまとめている。

- ①「共感」は新語であり、国語辞典に載るのは戦後である。
- ②戦前において「共感」一般の意味を担っていた語は「同情」である。
- ③共感においては、否定的感情における共感が特に意識される一般的傾向があり、そのため共感を表す語は広狭二義を帯びる傾向がある。和語では「あはれび(み)」などにそれが表れており、本居宣長はこのことに気付いていた。
- ④しかし狭義の「同情」を嫌う近代的傾向のため、広義のそれを表す言葉として「共感」が現れた。そこでは逆に肯定的感情におけるそれに力点がおかれる。
- ⑤しかし狭義の「同情」から目をそらせたり、優越心のためにそれを嫌悪したりすることは、共感自体を表層的で脆いものにする危険を孕んでいる。

(仲島 2006 : 24)

仲島は、戦後、「同情」とは異なる形で、肯定的感情を表すものとして「共感」が定着したと言っている。

2.2 辞書における「共感」

共感はいつから使われていた言葉なのか。その初出を『日本国語大辞典』で見ると、

「他人の考え、主張、感情を、自分もその通りだと感じる事。また、その気持。同感。*教育・心理・論理術語詳解〔1885〕「同情(略)彼の同病相憐むと云ふも亦此の意に外ならず。之を共感又は同感と訳するもあり」(下線:筆者)(411)

次に、この辞書の初出になっている『教育・心理・論理術語詳解』についてみてみよう。現在調査できたのは、『教育・心理・論理術語詳解』普及舎 編(普及舎:明治18年)である。そこで「共感」は「同情ノ部ヲ見ル可シ」(128)と、「同情」と同義のものとされていた。では、同情にはどのように記載されているのだろうか。

「同情〔シンパシイ〕同情ハ他人ノ快樂苦痛スル事ニ関シ己モ同様ニ之ニ感應スルノ義ニシテ即有意模倣ノ一種ナリ彼の同病相憐ムト云フモ亦此ノ意ニ外ナラズ之ヲ共感又ハ同感ト譯スルモアリ」(普遍舎 明治18年:34-35)

このことから「共感」は、もともと、心理学、教育学に関わる言葉であり、sympathyの訳語として登場し、「同情」、「同感」と同じ意味をもっていたことがわかる。

では、共感の初出となった『教育・心理・論理術語詳解』とはどのような本であったのだろうか。この本は、10種の書籍に登場する言葉の解説本である。この本の引用元の書籍を管見した限り、「共感」という言葉が唯一掲載されていた本は、初版が明治14年の『小学教育新編』であり、訳書であった。この書籍の序論に書かれている出典元の情報から、原書は、1876年ロンドンで出版された『*INTRODUCTORY TEXT-BOOK TO SCHOOL EDUCATION, METHOD, AND SCHOOL MANAGEMENT*』である。

『小学教育新編』の中で学校教員の資質に関して述べられた項に「多数ノ共感ハ教化ヲ上進スルコトヲ得ルニ足レリ」（西村編訳 1886：20-21）という項があり、原書では「3.Discipline」という教化に関する章中の「Sympathy of Numbers」（Gill1876：106）という項に相当する。この時代に、sympathyの訳語として「共感」という言葉がつけられたと考えてよいだろう。

こうして共感は、sympathyの訳語として導入されたが、その後、empathyの訳語としても徐々に定着していく様子が以下の変遷により見えてくる。

○共感に着目した empathy、sympathy の英訳（『研究社 新英和大辞典』。() 内は頁数）

年	版	Empathy	sympathy
1927年	初版	記載なし	【生理】共感（1733）
1936 （=1940）年	第2版	【心理】感情移入（595）	【生理】共感（2072-3）
1960年	第4版	【心理】感情移入（566）	共感、共鳴、（趣味・気持・気性などの）一致、など 【心理】共感 【生理・病理】共感（1836）
1980年	第5版	【心理】感情移入、共感 《他人あるいは他の対象のなかに自分の感情を移し入れること》（681）	共感、共鳴、（趣味・気持・気性などの）一致、など 【心理】共感 【生理・病理】共感（2139）
2002 （=2004）年	第6版	【心理】感情移入、共感 《他人あるいは他の対象の中に自分の感情を移し入れること》（797）	共感、共鳴、（趣味・気持・気性などの）一致、など 【心理】共感 【生理・病理】共感（2489）

では、同情や同感と同じような意味をもった共感では日本の辞書の中ではどのように展開

されていったのだろうか。ここでは、版が重ねられ、広く使われている『広辞林』と『広辞苑』について見てみたい。

『広辞林』で「共感」が登場したのは、1958年の『新版 広辞林』であり、その意味は「他人の意見や論説などを、そのとおりだと感じること」(=1963:504)とある。以後、1973年の『広辞林 第五版』で「他人の意見・論説や行動などを、そのとおりだと感じること」(479)と「行動」が追加され、その後、版を重ねてもその語義に変化はない。

一方、『広辞苑』によれば、その初出は、1955年の初版に「他人と感情を共にすること。また、その感情」(=1963:544)という文意で登場し、以後、第二版(1969年)で「[sympathy] 人の考えや主張に、自分もまったく同じように感ずること。また、その感情。同感」(=1973:566)とされる。また、第四版(1991年)から最新の第六版(2008年)まで「[sympathy の訳語] 他人の体験する感情や心的状態、或いは人の主張などを、自分も全く同じように感じたり理解したりすること。同感。「-を覚える」「-を呼ぶ」→感情移入」(1991:664)となっている。

以上から、次のことが言えるだろう。

- ① 日本語における「共感」は1885年が初出。1876年ロンドンで出版された学校マネジメントに関連する書籍中の sympathy の訳語として当てられ、もともとは、同情、同感と同義のものとして考えられていた。
- ② 1980年代以降、心理学において empathy の訳語として共感が登場した。
- ③ 1990年代以降、『広辞苑』において empathy (感情移入)と sympathy (他人の体験する感情や心的状態、或いは人の主張などを、自分も全く同じように感じたり理解したりすること) の訳の語義の両方を意味する言葉となった。

3 「共感」の普及とその動向—新聞紙の調査から—

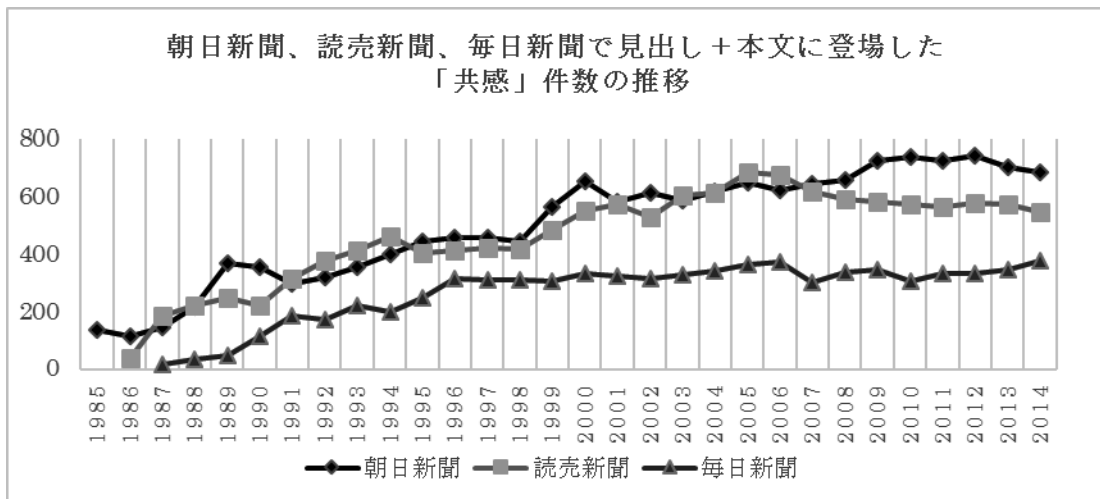
これまで、共感という言葉が日本でいつ、どのような意味をもった言葉として使われてきたのか、その歴史についてみてきた。ここでは実際に、私たちの耳目にふれる「共感」という言葉に注目していく。

本稿の目的の一つには、一般的な使用法とその頻度(普及)を調査することがある。そのため、①特定の分野に限られる雑誌等は対象にはできなかった、②言葉としての初出が1885年であり、その言葉の経年変化を追うためには100年以上続くメディアである必要があった、という2つの理由から、今回は新聞を調査対象とした。

3.1 調査結果

① 三紙における「共感」の量的比較調査

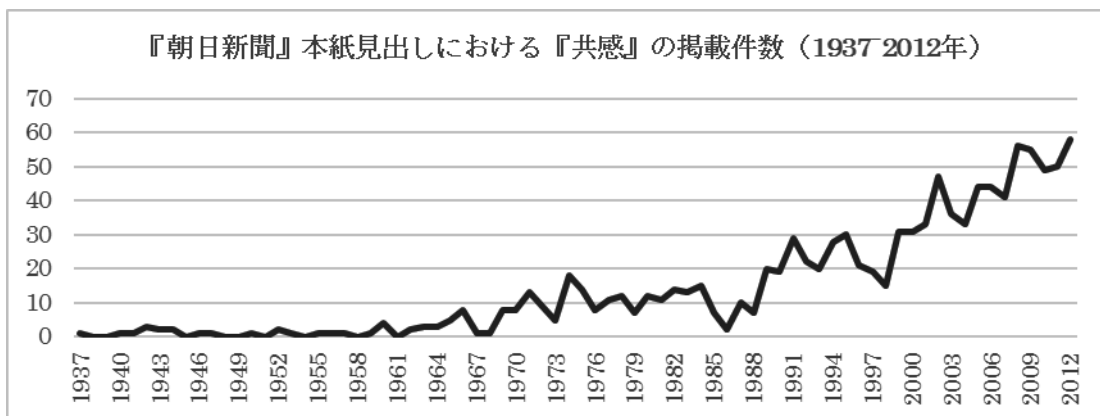
ここで、対象とする新聞は、年間発行部数の多い上位3紙である『朝日新聞』、『読売新聞』、『毎日新聞』とし、各紙のデータベースである『聞蔵Ⅱビジュアル』（朝日新聞）、『ヨミダス文書館』（読売新聞）、『毎日 News パック』（毎日新聞）を使用した⁽²⁾。その3紙の件数を掲載したグラフが以下である。



② 『朝日新聞』における「共感」の件数の経年変化

年間発行部数の多い三紙のうち、データベースで全文検索が可能になったのが最も早かった『朝日新聞』を中心に調査することにした。ここでは、『朝日新聞』の『聞蔵Ⅱビジュアル』の1879-1985年の縮刷版と1985-2012年の全文検索機能を活用し、見出しにおける「共感」の掲載について調査した⁽³⁾。

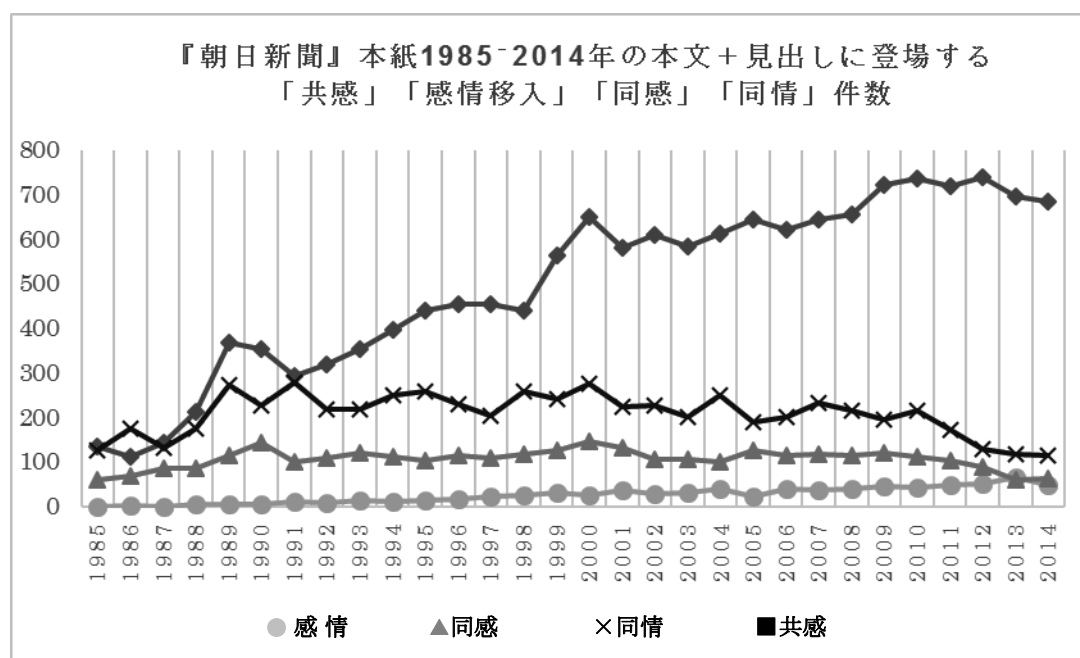
その結果が以下のグラフであり、『朝日新聞』における「共感」の単語の初出は1937年であった。



③共感と近い意味をもつ言葉の件数調査

上記の調査では、紙面ならびに紙幅等の変化により「共感」の数が増えたのか、それとも純粹に「共感」の使用数が増えたのか、判断がつかなかったため、1985-2014年の全文検索機能を活用し、前述した「共感」と近い意味をもつ「同情」、「同感」、「感情移入」についても、同様の条件で掲載件数を調査した。

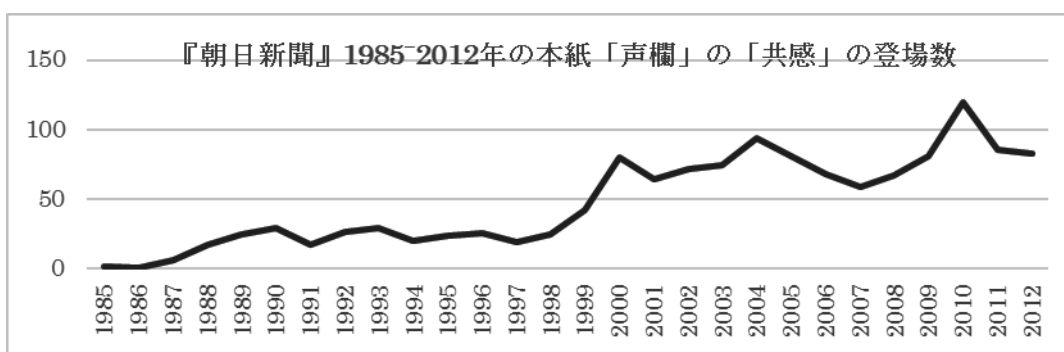
その結果が以下のグラフである。



④『朝日新聞』の投稿欄「声欄」における「共感」件数の変遷

ここまでみてきたグラフでは、新聞記者と一般投稿の記事に含まれる「共感」について調査してきており、読者が使う言葉であるかどうかわからなかった。そこで、1985-2012年までの全文検索における一般投稿の「声欄」の中の「共感」の登場件数について調査した。

その結果が以下のグラフである。



3.2 グラフから読み取れること

- ① 1985-2012 年の三紙いずれにおいても、本文+見出しで使用されている「共感」の件数は増加している。
- ② 1879-2012 年までの、『朝日新聞』における「見出し」の経過を追うと、「共感」の初出は、1937 年の記事であり、またその使用頻度については、戦後に徐々に増えていき、1980 年代以降右肩あがりが増加しており、『朝日新聞』についていえば 1985 年(137 件)から 2012 年(740 件)までの間で約 5~6 倍の増加がみられる。
- ③ 1985-2012 年、共感に意味の近い言葉（同情、同感、感情移入等）の件数は、概ね横這い（ないし減少傾向）にあるといえる。
- ④ 1985-2012 年、一般投稿である「声欄」における「共感」の掲載数は、90 年代後半から増加傾向にあり、全体的には約 5~6 倍近い増加がみられる。

これらのことから、「共感」という言葉は、朝日新聞においては戦前の 1930 年代に新聞に登場し、以後戦後になってその使用頻度が高まり、1980 年代以降は飛躍的に増加するようになる。意味の近い 3 つの言葉と比較すると、その掲載数が横這いしないし減少傾向にあるのに対し、共感だけは使用数が伸び続けていること、また記者ではなく一般読者の投稿欄である「声欄」の件数も 80 年代以降頻出するようになったことから、「共感」という言葉は 80 年代以降になって一般的な言葉として、普及・定着したといえるだろう。

4 何に共感を示すのか

ここまで、戦前から戦後にかけて、新聞紙上における「共感」掲載件数の動向についてみてきた。そこでは、「共感」の掲載件数がとくに 1980 年代に以降に増加していたことが分かり、一般的に定着した言葉になっていったことを確認した。そこで、本節では、「共感」が一般化していく過程において、どのようなことに「共感」をしていったのかについて調査をしていくことにしたい。

4.1 調査方法と分類方法について

朝日新聞の『聞蔵Ⅱビジュアル』を活用し、1985~2012 年の各年の 1 月~4 月の本文記事 4688 件を分析対象とした⁽⁴⁾。というのは、本節の目的が「共感」という言葉が対象としていることから変遷と用法の変化、またその普及度についてとらえることにあるため、各年の 1~4 月を抽出し分析することとした。

次に、何に共感をしているのかということについてだが、対象とした全件を概観し、記述内容に沿って 25 個の小項目に分類していった。この小項目をさらに大項目に再分類していくことにした。

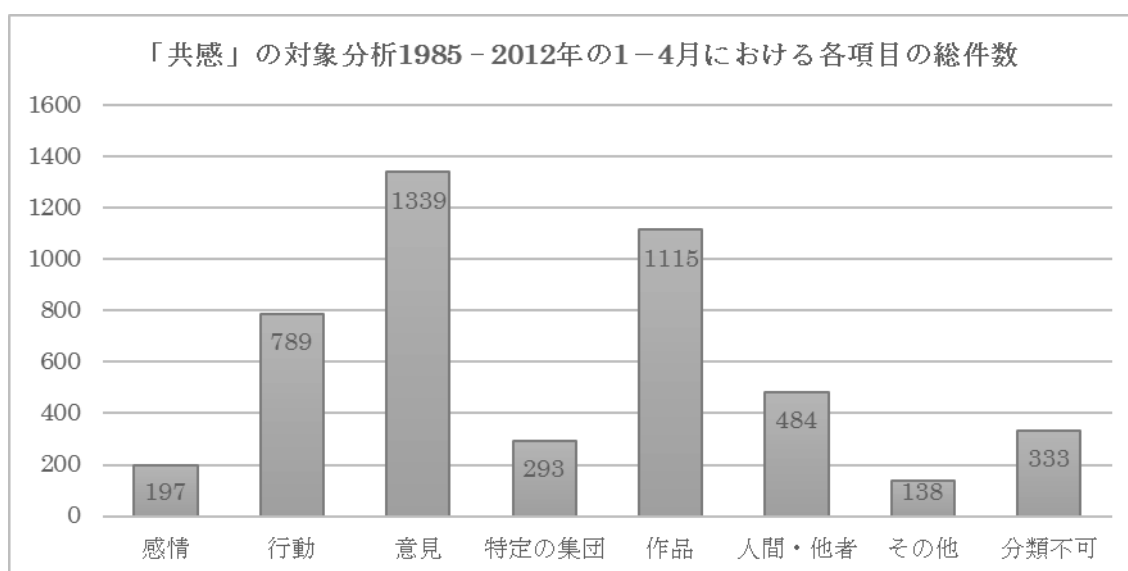
大項目の分類については、先行研究である仲島の共感する対象の分類を参考にした。仲島は共感を「他者の「感情」に限定するか、それとも「意見・主張」など理性的要素も含めたものを「共にする」こととするか」が問題であるが、実際に使われている意味の説明としては二つとも正しいと言えるが、前者のほうが勧められる使い方であると思う」（仲島2006：16）としている。この仲島の分類には、やや恣意性を感じたため、辞書の分類を参照し、最終的には「感情」「行動」「意見・主張」とそれに合わないものの項目を追加し、以下の8個の大項目に分類をした。

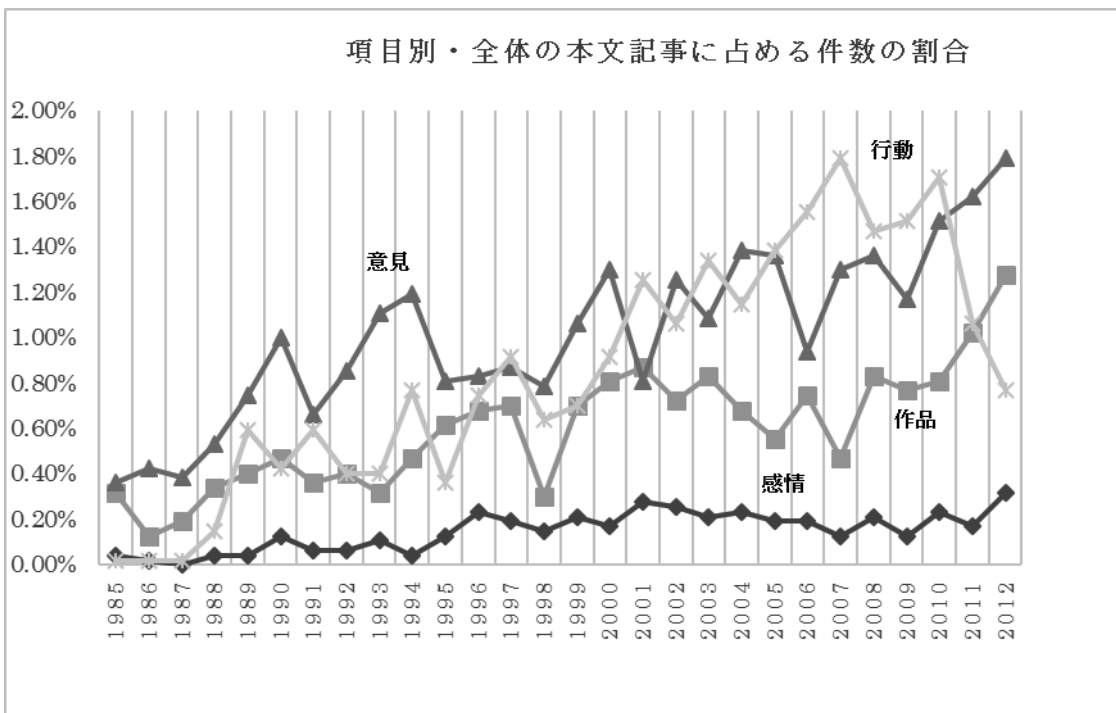
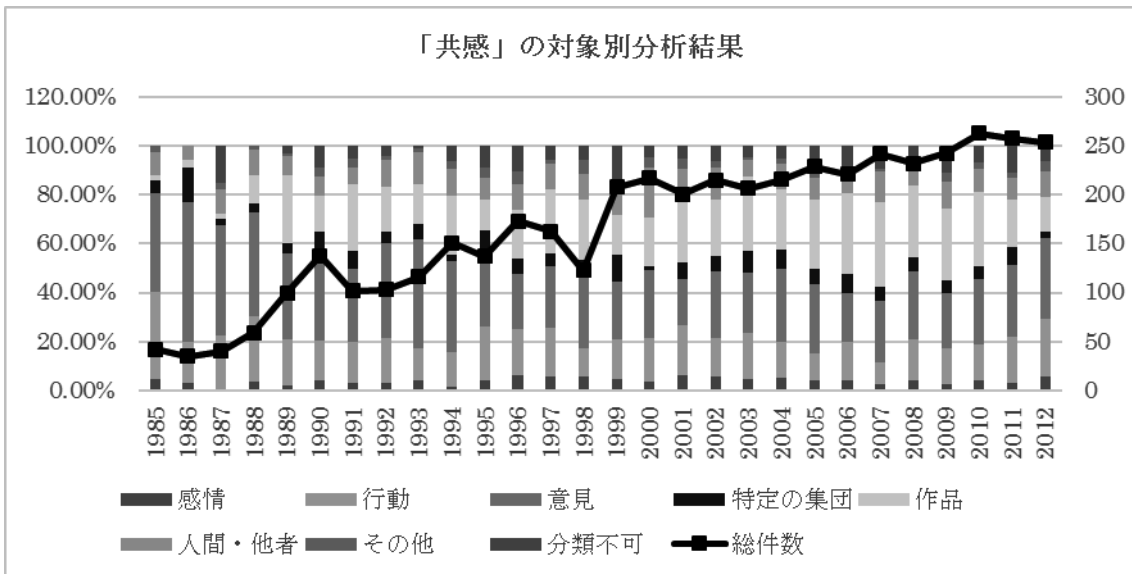
<8個の大項目>

大項目	小項目	大項目	小項目
①感情	思い・気持ち/感情	⑤作品	映画、著作、劇、ドラマ、歌、詩、番組など
②行動	活動・運動/行動・態度/事件・出来事/手法・方法/スポーツ/体験・経験/取組・政策・実践	⑥人間・他者	他者・人間一般/ 具体的な人・生き方
③意見	意見・主張・考え/裁判・判決/ 政策・方針・計画	⑦その他	自然・動物/法律・制度/ もの・商品/文化・文明/その他
④特定の 集団	機関・施設・企業/国家・地域/ 世代・集団・階層/政党	⑧分類不可	共感する対象がないもの、使用方法が異なるもの

4.2 大項目分類の結果

以下、分析結果のグラフである。





以上の分類からわかることは、

- ① 最も多い件数は、「意見」が 1339 件であり、「作品」が 1115 件、「行動」789 件の順になっている。
- ② 1985 - 2012 年の間で著しく増加したのは「作品」であった⁽⁵⁾。
- ③ 「感情」「意見」「行動」という先行研究の区分についていえば、「感情」が 197 件で

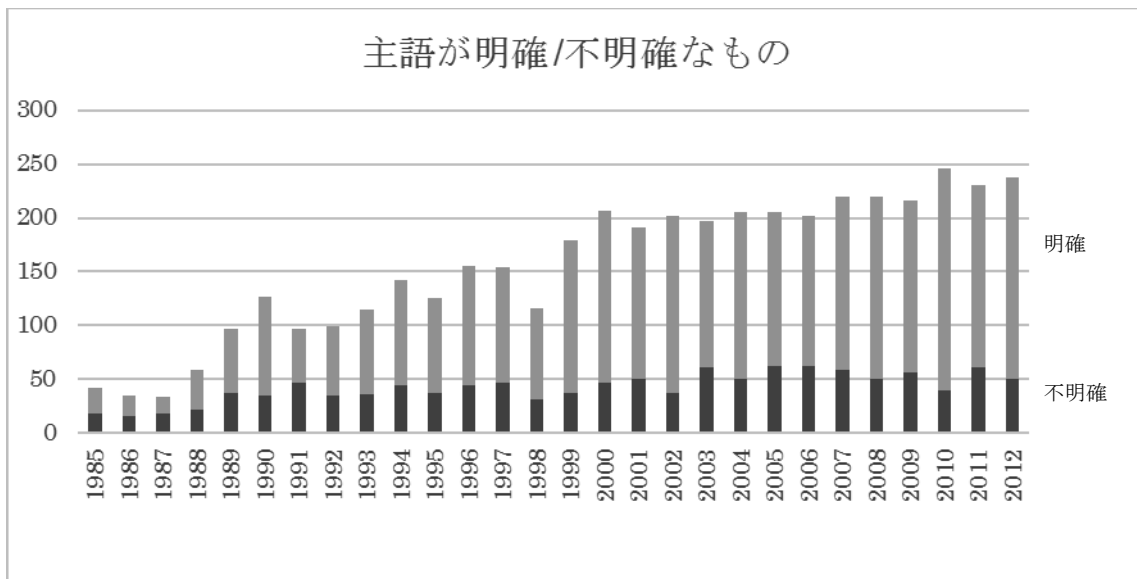
あり、仲島が重視する「感情」についての使用頻度は少ない。

- ④ 分類不可の使われ方がゆるやかに増加している。
- ⑤ 「共感」は、さまざまな対象に使用される言葉となっている。

仲島は、共感感情に対して使うことが好ましいとしており、その理由を「①その使われ方が多い、②「共感」とは〈sympathy〉であり、パトスを共にすることであるという意識が広がりつつある、③理性的な面も含めた広義の使用により適した言葉として「同感」がある」(仲島 2006 : 16)と言っている。しかし、今回の調査では、新聞というメディアが対象ではあるが、「感情」よりは「意見」への共感が多かった。

4.3 主語が明確でない「共感」

ここまでは、何に対して「共感」したのかということを取ってきたが、「共感を得る」、「共感を呼ぶ」など、誰が「共感」をしたのかを特定できない使われ方が多くみられた(4866件のうち 1188 件を占める)。主語の明確／不明確の使われ方の割合を表したのが以下のグラフになる。



このグラフから分かることは

- ① 「共感を得る」「共感を呼ぶ」などの主語が不明確な使用方法はほぼ横ばいである。
- ② 増えているのは、誰が何に共感したのかが明確なものである。

では、私たちは「意見」に対して「共感」することが多く、その肯定性を「明確」に示すようになったのだろうか。ここで、紙面内の世論調査の一部分についてみてみたい。

「しかし、男性の40代では、「賛成」が63%で他の世代より高い。働き盛りの世代では、Bさんに共感する人が多いようだ。」(1992.1.1 朝刊)

上記の記事では、「支持を得た」、「賛成」ということから「共感と呼んだ」ことを引き出している。その後、1999年の朝日新聞世論調査のライフスタイルの設問に「共感」が登場し、「共感」の有無を問うことは、知事や政策などの政治の分野にも広がっていく。

「(1) 結婚せず一人で生きていくことに共感するか(2) 事実婚夫婦を認めるか(3) 夫婦別姓を認めるように法律を変えるべきか。(中略)(1)で「共感するか」と聞いたのは、「場合によっては、そんな生き方を選んでもいい」という 気分をくみ取るためだ。」(1999.3.29 朝刊)

「この3年間に石原知事は、自衛隊式典での「三国人」発言や中国や朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)への批判などタカ派発言で物議を醸してきた。歴史認識や外交感覚の受け止め方は二分したが、「共感できない」(44%)が「共感する」(39%)を上回った。」(2002.4.24 朝刊)

「金大中・前政権の対北朝鮮政策だった包容(太陽)政策を継承・発展させるとした盧氏の平和繁栄政策について、87%が「共感する」と答えた。」(2003.2.26 朝刊)

1999年の設問自体で「共感するか」と問う目的を「気分をくみ取るためだ」としていることから、「共感」は「支持」や「賛成」などハッキリと自分の立場を示すまではいかないが、かといって「否定」の立場でもなく、状況によってはあり得るだろうということを示している言葉として使われている。また、「気分」での判断であり、確固たる意志や意見があるというわけではなかったり、自分でもはっきりと言語化できるわけではなかったりしても、「なんとなくそう思う」というような判断基準を内包していると言える。上記以外にも、その後も、政治の分野でも使われていき、はっきりと賛同することの根拠は示せないまでも、「なんとなくいい」などのあいまいな状態を含めた肯定性までも捉えられる言葉になっていると考えられる。

以上、共感という言葉の普及とその動向について考察をしてきたが、明らかになったことは、以下のことである。

- ① 「共感」はもともと哲学・教育・心理・看護等の専門分野における語義(sympathyとempathyの訳語)をもつものとして受容され、1980年代以降、現代語として普及した。
- ② 現代においては、広辞林・広辞苑にある他人の意見・主張・行動や、仲島のいう「他

人の感情」という意味規定を広く超えて、上述した小分類である 25 項目を含む、多種多様な事柄を対象の範疇におき、それらへの肯定的なとらえ方を表す言葉となっ
てきている。また、アンケートの設問に見られたように、意見や政策などへの肯定
性も「共感」で表して、それらが必ずしも「感情」から由来しているものとは
言えないという側面と、明確に自分の立場を表すことが困難でも、「なんとなくそう
思う」などの曖昧さを含んだ肯定性を表現できる言葉としても使用方法が広がっ
ている、といえる。

5 「共感」に注目することで見えること

ここまで、「共感」という言葉の歴史と新聞紙における普及動向について見てきた。結果、
専門的な言葉として受容された共感が、一般的な言葉として普及していく中で、意味規定
がより広いものとなっていったといえる。では、こうした専門的な言葉が一般的に普及す
る背景には何があるのだろうか。十分とはいえないが、今回見えてきた記事内容に注目を
し、その可能性の検討を試みてみたい。

5.1 社会問題として「共感」の欠如

他者・人間一般への「共感」に注目をすると、人間一般への共感が欠如しているという
指摘が見られる。

「日本は教育程度が高いといわれているけど、アフリカに関する知識はとても貧弱。
それだけならまだしも、人間に対する共感や感性を欠いているように思えてならな
い。何のための教育なんだろう。同じ人間としての感性をもって、飢餓問題をみつ
めてほしい、と訴える。」(1985.2.22 朝刊)

「国際感覚を身につける以前に、人というものへの思いやり（共感する力、想像力）
が根本的に育っていないと思うのです。」(2001.4.30 朝刊)

「現代は忙しすぎて生きた人間との交流が二の次になっている。自らの衝動を統制す
る能力や、相手に共感する能力が欠落してきているのかもしれない」(家族殺害、
遺体切断事件に対する家族機能研究所代表コメント)(2007.1.14 朝刊)

このように、特定の誰かというわけでない、他者・人間一般への「共感」が乏しいこと、
それに伴い他国での出来事や人々が抱える問題への関心の低さ、惨憺たる事件が起こって
しまうことなどが指摘されている。

このような傾向は、1992年を皮切りに「共感性」という言葉が登場することからも見てとれる。「共感性」という言葉が掲載された記事は全部で12件であり、全体から見れば微々たるものではあるが、12件中10件が2000年以降の記事となる。

「不可欠なコミュニケーション能力や共感性の高さ」（2009.2.14朝刊）、「人が喜ぶ姿を自分の喜びとできる『共感性』」（2008.4.5朝刊）という肯定的な使い方もあるが、「共感性」の低さを指摘するものが多い。

「少年は…最終的には不登校になった。そしてこのような生活は、少年の視覚刺激に対する興奮を一段と高め、情性の希薄さや共感性の乏しさを更に際立たせるとともに、少年は、将来への不安などから自棄的な気持ちを強めていった。」（2008.2.27朝刊）

「このような環境に置かれた子どもたちは、どことなく元気良さに欠け、共感性に乏しく、人間関係でつまづくことが多い。」（2010.4.27朝刊）

「他者への共感性も欠如している少年像」（2005.3.5朝刊）

これらは、犯罪や事件を起こした加害者についての著述に共通して、「共感性」の欠如が問題だと指摘される。

5.2 コミュニケーション技術としての「共感」

他者・人間一般への「共感」の欠如が問われる一方で、行動や態度としての「共感」の重要性を示唆し、人間関係のあり方を提起するものがある。

「この女性は、先の見えない現実問題に直面して、孤独感に耐えかね、何度も、同じ電話をかけてくるのだろう。だから、相手の気持ちを根気よく聞いて、共感する以外にないんです」とK子さんは言った。」（いのちの電話）（1991.2.15朝刊）

「周囲の人の接し方も問われてきます。例えば「夫が死んでどうしていいか分からない」と言う人に「土地を売ればいい」とか「他の子供のために頑張りなさい」とか言わないこと。聞き手が答える必要はないのです。大変なんだなあ、と共感をもって聞ければそれでいいのです。」（精神科医の話）（1995.2.17夕刊）

「励ますことは、本人には苦痛になりかねない。言うことを、じっくり忍耐強く聞き、共感することが大事。」（うつを生きる）（2004.1.26夕刊）

「認知症の人が騒いだり、徘徊（はいかい）したりするのには理由があるととらえ、共感して接するのが基本だ。」（2005.1.20 朝刊）

「傾聴の基本である相手の言葉の「繰り返し」と、気持ちを受け入れる「受容」「共感」だ。心細さが和らぎ、包まれるような温かさを感じる。」（悩みを抱える相手に寄り添う傾聴ボランティア）（2012.2.18 朝刊）

1990年代頃より、受容的な「共感」がみられる。孤独感、近親者の死、認知症、うつ病、グリーフ・ケア（2004.3.11 朝刊）、五月病（1997. 4.28 夕刊）など、決して他人事ではなく、社会的に支えていく必要のある人達への接し方などの記事である。また、昨今は「傾聴ボランティア」という言葉も耳にするようになり、悩みのある人など、ある特定の症状があるわけでないが、孤独感や肯定感が持てない状態などにある人への取り組みも見られている。

こうした「共感」は大人のみならず、子どもに対するものとしても見られる。キレる子どもに対し「まずは大人が肯定的、共感的に子どもの声を聞き、心を解放すること」（1998.2.5 朝刊）、「こころから共感して、子どもをほめること」（1999.1.19 夕刊）、「教職員が子どもたち一人ひとりに共感し」（1997.1.29 朝刊）、「親はまず子供の気持ちを理解し、共感してあげることが大切」（2002.3.14 朝刊）、「子供の存在（長所、短所）を丸ごと捉えて」（2004.3.9 朝刊）などがあった。

一方においては、「共感」の欠如が少年犯罪や社会問題と結び付けられて語られ、他方において、問題や困難を抱えた個人に接する際に必要な態度、もしくはコミュニケーションとして「共感」が重要視されるという、このような状況をどのようにとらえればよいのか。

前者は、家族や地域共同体の機能が弱くなっていたり、個人化が進んだりする中で、人間一般に対する「共感」が失われることへの警鐘であり、後者は、その回復を目指して新たな取り組みやコミュニケーションの在り方への提起ととらえることもできる。

一方で、他者に対して「受容的」に、「共感」的に接することは、これまで心理学やカウンセリングなどの専門家の中で鍛錬されてきた手法であり、もともと固定化された役割（患者と支援者、カウンセラーと来訪者など）を有する非対称的な関係で求められていた資質ないし能力であったといえる。これらが専門性の枠を超えて、本来、通常の間人間関係のなかにも、求められ始めているということだろうか。

6. おわりに

ここまで、「共感」の言葉の歴史や意味の変遷、戦前から現代にいたる新聞紙上における

言葉の普及と用法の変化に着目してきた。「共感」の掲載件数がとくに 1980 年代に以降に増加し、一般的に定着した言葉になったことが見えた。また、もともと教育・心理の領域で使われていた言葉の訳語であったが、専門的な言葉として受容された共感が、一般的な言葉として普及していく中で、他人の意見・行動・感情という辞書中の意味規定を超えて、多種多様な対象を範疇に含む言葉として変化していった。

その中でも、他人の具体的な意見・行動・感情ではなく、他者そのもの（人間一般）への共感という新たな意味既定の用法に着目してみると、共感性の欠如と社会問題や犯罪の関連性の指摘、またコミュニケーション技法としての「共感」の重要性の示唆が現代的課題となっていることが見えてきた。以上が本研究で考察できたことである。

最後に、本稿では「共感」という言葉の動向について、各時代における事件・出来事との関係や、「共感」が登場する記事のテーマとの関係、心理学や看護学、教育学等での「共感」の変遷との関係への分析まで至らなかった。また、新聞紙上に現れた他者への受容的ないし共感的コミュニケーションが、これまで哲学において考察されてきた「人間と社会の形成における共感の役割」を有するのか。これらは今後の課題としたい。

注

(1) 「共感」は多義的な言葉であり、学問的にも学際的な言葉である。古くは、18 世紀イギリスのヒュームやスミスなど「人間と社会の形成における共感の役割に着目し、その道徳哲学ないし社会哲学の中心的な概念の一つとして sympathy（共感）」（山崎 2015：i）が用いられている。その他には、本文中にあるように心理学や看護学などの領域で「共感」をする際の行為者の内面の動きや、対人支援の際のその効果などについて研究されている。しかし、今回は日常的に使われている「共感」という日本語に注目をし論文を展開することとする。

(2) 各データベースの解説。（○年～、本文検索可能など）

- ・朝日新聞「聞蔵Ⅱビジュアル」：1984 年 8 月以降の記事から全文検索が可能。
検索条件：朝日新聞、見出し+本文、本紙（地方版を抜く）
- ・読売新聞『ヨミダス文書館』：1986 年 9 月以降、読売新聞記事テキストを収録。
検索条件：全文検索、見出し+本文、全国版（地方版を抜く）、大分類（記事分類）すべてを選択。
- ・毎日新聞『毎日 News パック』：1987 年以降の全文検索が可能。
検索条件：見出し+本文 面名：全てを対象、面種：東京朝、夕

(3) ここで朝日新聞『聞蔵Ⅱビジュアル』について、1879～1989 年の縮刷版は記事本文での用語検索ができないため、条件をそろえるために 1985 年以降についても「見出し」のみを検索条件とした。

(4) ここで朝日・読売・毎日の三紙のうち、朝日新聞を選んだのは、全文検索の範囲が他紙に比べてもっとも広がったからである。

見出しのみ文章からでは、何に共感したのか、の分類が困難であった（例：「広がる共感」など）ため、本文ならびに小見出しのみを分析対象とした。そのため、本文中の共感掲載数が少ない1937年～1984年までの縮刷版の記事は、この分析の対象外とした。

(5) 作品には、映画や演劇、ドラマなどの作品のストーリーや登場人物、音楽などに対する「共感」が含まれている。作品の増加という変化が多くみられた項目ではあるが、どのような内容の作品に多くの共感を集めているのかなどの分析については紙面の都合上、今後の取り組みとしたい。

参考文献

Gill, John, 1876, *INTRODUCTORY TEXT-BOOK TO SCHOOL EDUCATION, METHOD, AND SCHOOL MANAGEMENT*, London: Longmans, Green, Reader, and Dyer.

近藤邦夫, 1997, 「クライアント中心療法と教育臨床」『こころの科学』74:64-68.

『研究社 新英和大辞典』初版、第2版、第4～6版 研究社.

『広辞苑』初版～第六版 岩波書店.

『広辞林』新版、第五～第六版 三省堂.

酒井直樹, 2007, 『日本／映像／米国 共感の共同体と帝國的国民主義』青土社

仲島陽一, 2006, 『共感の思想史』創風社.

西村貞 編訳, 1886, 『小学教育新編 第3巻 学校管理法』金港堂.

『日本国語大辞典 第二版』小学館.

普及舎 編, 1887, 『教育・心理・論理述語群解』普遍舎.

山崎広光, 2015, 『共感の人間学・序説—概念と思想史』晃洋書房.

<データベース>

朝日新聞データベース『聞蔵II ビジュアル』.

読売新聞『ヨミダス文書館』.

毎日新聞『毎日 News パック』.